



ピッポ新聞

2008

5

No.231

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

そわって、 年齢のせい?

世間では「後期高齢者医療保険制度」が大問題となっているが、年金の一部をすでに受け取っている身としては、この問題は無視できないのである。

ところで、この文を打ち始めたら、「後期高齢者」と打ち込んだはずが、ほとんどのマックは「高貴高齢者」と変換してしまった。

そこで、ふと考えた。ありえないことではあるが、もし、官僚や自民党の連中が、老人を「高貴」な存在として少しでも尊敬していたならば、こんな差別・選別的保険制度などを考え出しはしなかっただろう。きっと、自分たちだけが「高貴」な存在だと考えているからこそ、今度のような弱者切り捨ての保険制度を考え出したのだと、ぼくは思うな。

教育基本法の改悪までして、子どもたちにかがらの倫理・道徳観を強制しようとしている「高貴」なみなさんだけ、彼らの弱者いじめの倫理観こそ、いま弾劾されるべきだろう。

「政府のバカヤロウ」と言いつつも、でもな、なにかにつけて自分の歳を意識させられる昨今である。そこで自分の歳を意識させられた、諸々について綴ってみることにした。

さんざんだった、駿府マラソン

3月2日、駿府マラソン十キロに参加した。結

果は、1時間6分51秒というさんざんなものであった。これは60歳以上の部に参加した268人中220番だと完走記録証にあった。

これには前章がある。S幼稚園の20代の先生たちとしゃべっていて、ひょうんなことから彼女たちと、今度の駿府マラソンに一緒に参加しようということになった。名乗り出たのは3人で、さっそく、ぼくを入れて「チーム・ピッポ」を結成したのである。

1月までは、それぞれで練習していたが、大会が近づき、合同練習をしようということになった。庵原にあるナショナル・トレーニングセンターには一周八百円のランニングの周回コースがあるというので、ここで夜7時からやることになった。

彼女たちは5キロにエントリーしているので、とりあえず、5キロをいっしょに走ることにした。ところが、走り始めて半周ほど併走してわかったのだが、ぼくは彼女たちのペースについていけないのである。

おじさんとしては、心ひそかに彼女たちの前で格好の良いところを見せるつもりでいたのである。しかし、なんとしたことか、5キロを走る間に3人に一周ぬかれてしまったのだ。格好良いどころか、彼女たちのまえに無様な姿をさらしてしまったのである。こんなはずじゃなかったのにな!

翌日幼稚園に顔を出したら、教頭のYさんが「ピッポさん、さすがピッポさんだと、若い先生たちが言ってたよ」だと。「そんなこと言ってたの」とでも軽く受け流せばいいのにさ、「こ

れを聞いたばくは、「おれ、彼女たちに一周抜かれたんだよ」と、むきになつて否定していた。同情されたと思ひ込み、年寄りのヒガミ根性を丸出しにしてしまったのである。彼女たちの優しさとして素直に受け取ればいいものを、こんなことに向きになるなんてさ、これこそ、ぼくが歳をとつたせいなのかな? 彼女たちに聞いたところ、父親の年齢はぼくと同じか、少し若いぐらいであった。

ところで、今年の駿府マラソンは例年より参加者が多かった。これはほかのマラソン大会でも同じ傾向だったそうである。その原因は、「東京マラソン」が派手に報道されたことに起因しているという。

実は、ぼくもあれを見て、来年はぜひ参加してみたいと触発された一人である。

なに、理由は至つて単純、ただ銀座や浅草の大通りを大手を振つて走つてみたいだけさ。

一念発起したのはよいけれど

しかしなに、駿府マラソンの結果は、フル・マラソンを走るなどと他人様に言えば「おこがましい」「年寄りの冷や水だ」などと、ただちに嘲笑が返つてくること間違いなしだ。

そこで一念発起して、少し体を鍛えようと考えたのである。

これまででは週一回、1時間ほど有度山を走る程度であったが、さらに、店を閉めてから、市営のジム(テルサ)に通うことに

した。

そこは1回600円でプールと筋トレができる訳の分らない機械がいくつもならんでいて、サウナやジャグジーの風呂もある。ぼくはそこに週2回ぐらいのペースで通いだした。

このシステムは、そのつど指定された番号のロッカーで着替えるのだが、先日これで大失敗をしてしまった。

このロッカー、自分で4桁の番号を決めて、扉のところにある数字を押さえると開ける仕組みなのだ。

プールから上がったばくは、着替えるためセットした番号を押さえたが、一向にロッカーは開かない。場所を間違えたと思つて隣のロッカーを試してみた。やはり開かない。おかしい? 故障かと思ひ、フロントへ行つて係りにきてもらい、マスターキーで開けてもらったのだが、なんと中味はぼくの持ち物ではなく、他人様のものである。係りの人は、ぼくのロッカーナンバーを確認に再度フロントへ戻つてくれた。その間に何とか思ひ出そうと考へていたら、大変な間違いに気付いたのだ。

この場所は3日前に使つた場所であつて、きょう指定された場所は、反対側のもつと奥の方だった。そうだ、窓から高架のバイパスが見えたのだつて。ここだ!

自分のセットした番号を押したら簡単にロッカーの扉は開いたのである。そこへ係りの人が戻つてきた。「もうしわけない!」ぼくは平謝りだ。

いかんいかん!

アルツハイマーが始まつたのかと暗澹たる気持ちになつた。これも歳のせい?

えー、血圧が高い?

このロッカールームの出入り口に、自動の血圧計が備えられている。ある日、戯れにこれに腕を突つ込んで血圧を測つてみた。出てきた紙をみると、「167・89」とある。

いつもなら、こつこつものはすぐに捨ててしまふのだが、なぜか、ポケットに突っ込んでもつていた。後日これを、親しくしていただいているT先生にみせたら「ちよつと高いようですね」と言つて、翌日家庭用(?)の血圧計と記録するノートを持ってきてくれた。「これで毎朝起きたら計つて、2週間したら来てください」という。

言われた通りに毎朝計測した。数値はだいたい160台、170台ぐらい、時に180を越えることもある。

2週間たつて、おそろおそろクリニックへ。心臓の専門医でもあるT先生は、ぼくの胸に聴診器を宛てて、あちらこちら場所を変えながらじっくり調べている。そして「軽い弁膜症のようですね。心臓のエコーをとりましょう」という。

そういえば、ぼくは二十歳前後の頃、東京女子医大でも軽い弁膜症だと言われたことがあつたつて。

あれから四十年、今になつて、再び症状が出てきたのかな? T先生は「たぶん、子

どものころのリューマチ熱の影響だろう」と言っていた。

Ｔ先生は、心電図・血液・レントゲン・尿・心臓のエコーの検査の結果とパソコンに心臓のイラストを写して、ぼくに見せながら説明してくれた。

弁膜症は数字で表すと、5段階で1くらいで、たぶんこのまま問題は起こらないでしょう。血圧が高いのは、血が逆流するぶん、心臓が強く働き、歳ともに弾力性が劣って堅くなった動脈の関係で、血圧も上がるのだという。

1年ほど前にみていただいたときも、少し糖の数値が高いといわれたのだが、糖以外にも悪玉コレステロール値も少し高いです。こちらも気をつけてくださいと言われてしまった。

で、ぼくは一番知りたいことを、おそろおそろＴ先生に尋ねた。「あのー、山登りや走ることは?」「それは、かまいません。大丈夫です」あーよかった。山行を禁止されたら、お先真つ暗だもんね!

でもな、高血圧や糖尿病を気にしなければならぬなんて、これも歳のせい?

歳を嘆くばかりじゃね

歳をとったことを嘆いてばかりいてもしかならないので、別のことも綴ってみよう。

今の世の中「それって、何さ?!」ってことが、いっぱいあるよね。歳をとったからこそ、それを世間に向けて指摘できるこ

とだつてあるのだ。言い換えれば、裸の王様にたいして「王様は裸だ!」って、はつきりさげぶことができるってわけさ。

たとえば、2月のことだけど横浜の古書会館へでかけとき、冷たい雨がふる中、婦人が片方の手に傘を持ち、もう片方は懐手に何か抱いて公園を歩いていたのだ。よく見ればそれは子犬だった。何という種類か知らないけど、手の上に乗る小型の犬だった。もしかして、これは犬の散歩?

バカか!

雨が降っているからって、懐に犬をいれて犬の散歩とは、どういうことだ!

「王様は裸です」

ペットの犬といえ、近くの県立美術館のある公園では、多くの人が犬を散歩させている。冬の時期、犬にチンケな服を着せて鎖に繋ぎ引つ張っている手合いを目にするが、ぼくにはこれは動物虐待に見えて仕方がないのである。どうしても理解できないことだ。

こんなこともあつたづけ。これもまたご婦人の話。

去年の大晦日、れいによって山にいたのだが、ぼくはそこで度肝をぬかれたのだ。この五十代前半のご婦人は前の晩、山小屋で一緒だった人で、男女7人のパーティーのひとりであつた。

朝、彼女たちのパーティーが出発してから、しばらくして、ぼくもパーティーの後をたどった。積雪は1メートル以上で、登山道を踏み外すと大腿部まで埋まつてしまつた。樹林の中をゆっくりと登っていくと、

前方左の登山道のすぐ脇で人間が不自然な格好をしていた。どこか具合でも悪いのかと近づくと、それは先ほど先行したご婦人で、な、な、なんと、彼女は大きい方の用を足していたのである。

彼女がしゃがんでいたのは、登山者にじやまにならない程度にちょうどだけ登山道を横にずれただけであつて、人の目を気にして、登山道を外れていたわけではないのだ。

常識がないなどと言う前に、ぼくはこれには言葉もなかつた。

長いこと山登りをしているが、こんなことは初めてである。前の晩は、いかにも山慣れた感じの都会のしゃれたご婦人だなど好ましく見ていたのだが、幻滅もいいところだ。

「おばさん、かにしてくれよ!」

なんだ、そんな些細なことばかり書いて、といわれそうだけど、些細なことだから言いたいので、これも歳のせい?

5対5を目指して

さて、駄文を書いてきたが、この手の話はいくらでもあり、切りがないからこのあたりで一休みにして、またピツポ新聞のネタに困つたらということにしよう。最後に、「歳をとった」からこそつていうぼくの夢をちよとだけ。

子どもの本屋を始めて、たぶん今年でちょうど30年目になるとおもふ。子育て終わつてすでに数年は経つた。そこでぼくはある

ことを考えたのだ。

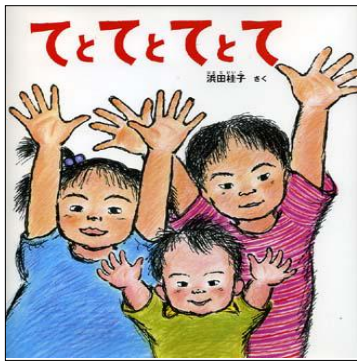
それは「5対5」の生き方をしたいということだ。「5対5」は仕事に半分、遊びに半分の時間をつかって過ごすこと。仕事の5の内、3が子どもの本屋として、後の2が古本屋として。

遊びの5の内3が自然との遊びに、1が趣味としての古書に、後の1を社会へ目を向けて、ちょっとだけ考えたり行動する時間にしたいな！

こんなことを太平楽に言えるのは、歳をとったせいかな？でも、これは是非やりたいな！

ねー、この本読んだ

『てとてとてとて』 (浜田桂子・作 15
75円 福音館書店)

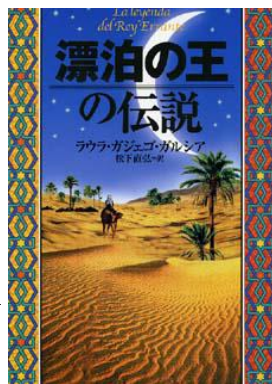


手、ふだん意識せずに使っている人間の手。改めてその働きに注目してみると、ものすごさがわかる。この絵本はその手の働きの場面を様々に描くことで、それを再

認識させてくれる。作者は子どもたちに

「もしかしたら ては こころがでたりは いったりすると ころな のかもしれない」と訴えて結ぶ。この絵本『かがくのとも』2002年7月号として発行されたものの新版。

『漂泊の王の伝説』 (ラウル・ガジエゴ・ガルシア・作 松下直弘・訳 1575円 偕成社)



キングダ王国の王子ワリードは、だれからも慕われ賞賛されていた。王子のなにより自慢は国随一のカスリード(長詩)の名手として自他共に認められていた。しかし、貧しい絨毯織りの男に3回も詩のコンクールで破れて

しまった。賞賛されることしか知らなかった王子は、男へのねたみが生じた。王子の詩に欠けているものに気づくことはなかったのである。絨毯織りにとって不可能な人類の歴史を織り込んだ絨毯を折ることを命じたのである。家族からも切り離されて、男は何年もかけて絨毯に取り組んでとうとう死んでしまった。そこに遺されていた絨毯は？砂漠にさまよい出た王子の苦難な冒険が・・・

歴史上の事実を織り込んだファンタジー。

訳者も述べているようにとても完成度の高いスペインの作家の物語。



『エイレーネーの瞳 シンドバッド23世の冒険』 (小前亮・作 1470円 理論社) ミステリー・ファンタジーとあるように、これはエンター

テインメントな作品。舞台は17世紀オスマン帝国の時代、ヨーロッパとアジアが向きあうイスタンブールを中心に展開する。「エイレーネーの瞳」と呼ばれ指輪と、師匠のシンドバッド22世の行方を追って23世のセルムとその弟子マレクの冒険は、空飛ぶ絨毯にのって砂漠を越えて縦横無尽である。

お知らせ

宇梶静江さんの講演会

十月四日(土) 一時半から

テルサ(JR清水駅すぐ側) 6階研修室
宇梶さんは福音館書店から自身が考案した布絵で『シマフクロウとサケ』『セミ神様のお告げ』『アイヌの神話 トーキナ・ト』をだしています。アイヌの人たちの自然観やものの見方などのお話しが聞けます。アイヌ刺繍のワークショップや作品展示も予定しています。詳細は次号で！